

平成 23 年度

千葉大学先進科学プログラム入学者選考課題

課題 II-D 解答例

[II-D] 解答例・解答のポイント

問1 解答例

他者の作成した文芸や詩といった作品の一部または全部を改変したりそのまま引用して、自らの作品の中に導入すること。たとえば、有名な和歌の言い回しの一部を用いて、新たな和歌を作り出す「本歌取り」などが挙げられる。本歌取りは、もともとなった有名な和歌の情景を利用することで意味やその連想に広がりを持たせる技法であり、一般的に認められている点で、「オマージュ」や「パスティーシュ」と共通するが、「間テキストな文化実践」という言葉には、「剽窃」や「盗作」といった否定的なニュアンスを伴うものも含む、広い概念である。

問2 解答例

既存の作品の一部を引用したり改変して組み込むなどして新たに作成された作品が、もともとなった作品をうまく利用して、芸術性の高いものに仕上がっているかどうかは、一切考慮されず、既存の作品との類似性が高ければ、一律に「財産権の侵害」であるとして、悪いことだとされてしまう、と筆者は考えている。

このような評価基準が敷衍することで、新たな作品を生み出すときに、既存の作品との類似性だけを考慮して、そもそも新しい作品が芸術として価値があるかが見失われることによって、新たな作品を生み出そうという意欲や動機づけが社会から消えていくかもしれない。

問3 解答例

筆者の家は古い木造の街並みにある。こうした古い町並みは、「私的所有権」を過度に主張しないことによって成り立っていた。たとえば家の屋根を互いに隣の敷地に張り出すことによって、両家のすき間に雨水が貯まらないように工夫されていた。しかし筆者の隣の家が売り出され、新しい住人は、古い家を取り壊し新しい洋風の家を建てようとしていた。このとき新しい住人は、自分の敷地内に余裕をもって家屋をつくるのだから、筆者の家の屋根の出っ張りを、筆者の費用で削ることを主張した。もちろん法律的にはこの主張はただしいが、これによって互いに互いの家を護り合うという「文化」が消えたことになる。

互いに互いの家を護り合うという、こうしたあいまいでグレーな領域は法律的な私的所有権では割り切れない。このような領域を私的所有権によって割り切ろうとすることを、筆者は私的所有権の過剰なまでの緻密さと表現している。

問4 解答例

観念的とは辞書によれば「現実を無視して抽象的・空想的に考える」ことをいう。つまり、自分勝手な理想を抽象的に描き、それを現実と取り違えることだ。つまり筆者は「私的なもの」が「排他的」に成り立つという考え方は、空想的であり現実を無視しているといっている。

たとえば、「私の所有物」は私の意のままにできるという考え方は、「私的なもの」を排他的なものを取り違えていることではないかと筆者は考えている。さらに、筆者は、「自分探し」という現象も、自分というものを「排他的」に考えている、つまり他人の影響を受けていない純粋な自分という観念にとらわれているのではないかと問題を提起している。

問5 解答例

増田がもっぱら「作品」や「コンテンツ」など芸術の分野における「パクリ」への非難の増大を論じているのに対して、鷺田は、土地などの「私的所有権」から「私的なもの」一般の観念化を論じているが、どちらも、財産権ないし私的所有権への侵害への過剰反応を問題にしている点が共通している。すなわち増田の論じる「財産権の侵害」としてのパクリへの非難の近年の増大は、「私的所有権」の「この社会における過剰な緻密さ」（鷺田）という事態に他ならない。

ところでこうした事態が生じた背景の理解も重なっている。たしかに、増田は、「アメリカで知財ビジネスや情報産業の興隆」（「文化の産業化の拡大」）という経済的側面を挙げ、一方、鷺田は、私的所有権の精緻化の現象は、土地や家屋などの財産における「私的なもの」、「私の」身体、「自分探し」など社会の様々な領域での「私的なものの観念化」に対応しているといっており、一見両者の議論はすれ違っているようにもみえる。

しかし、本来的にあいまいであった「作品」を知財化するために、作品をコンテンツと呼び、誰かの所有物にしたことにより、結果的にパクリへの不寛容が高まったのだとすれば、作品の「観念化」が進行しているということもできる。街という「作品」が誰か特定の人に帰属するとはいえずインターデペンデントであるように、音楽などの作品も誰かに決定的に帰属するということはなく、インターデペンデントなものではないだろうか。

このように両者の共通点をおさえると、インターデペンデントなものこそが本来的な人間や作品のあり方ではないだろうか。たとえば民話や昔話などの作品は、個人のオリジナルということではなく、口承によって少しずつアレンジが加わりながら生成していくものであり、いわば何世代にもわたり共同作業で一つの作品を作り続けているようなものだろう。それが歴史的には当たり前だったのではないだろうか。